

# 高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

# Newsletter

No.022

2013.8

- 新しい学習支援  
—「リメディアル」を越えて
- FD活動報告
- 新任教員紹介
- スタッフからひとこと

信州大学 | 高等教育研究センター  
SHINSHU UNIVERSITY



## 新しい学習支援—「リメディアル」を越えて

学習困難への対応のひとつに補習授業（いわゆる「リメディアル」）があり、リメディアルは既に多くの大学で導入されています。しかしリメディアルが必要な学生は来ないというジレンマは、日本ではまだ解決されていません。なぜリメディアルは機能しないのかを考え、学生を学習に向かわせるための、機能する学習支援を考えてみたいと思います。

### リメディアル教育はなぜ機能しないのか



最大の問題は、リメディアルとして開講されている授業に単位が付与されないことです。高校の学習内容への単位付与は大学教育の質の低下を招くため（吉田，1999）、大学としては単位を付与するわけにはいかないのですが、正課外で行えば、学生がこれまで避けてきた内容の学習を単位という外的圧力もなしで行うことになるというジレンマに陥ります（栗津・竹内，2007）。本来受講すべき対象者が履修しない、欠席しがちという結果は、多くの大学から報告されています。その背景には、余計な授業はとりたくない、プライドが許さない（庭崎，2008）、あるいは「できない学生」としての「スティグマ（烙印）」を押されたくない（濱名，2006）、という学生の心理が働いていると考えられます。

次に、補習科目と他科目との関連付けおよび開講のタイミングについての課題が指摘されています。数学や物理の授業では、同じ学問分野だからといって高校と大学の科目が自動的に接続するわけではなく、機械的に補修科目にすれば解決する訳ではありません（荒井，1996）。正規科目履修に備えた事前開講では科目との関連性を実感しづらく、かといって同時開講では、補習で得た学力を十分発揮できず正規科目で不合格になるケースもあるようです（庭崎，2008）。

いずれの科目でも「学力別クラス」、「補習クラス」といったリメディアル教育に結びつくと思われる方法は学生にあまり支持されず、教員の「教え方の工夫」への要望が多いという調査結果もあります（服部，1996）。

学習困難への対応策を考える時に、私たちはえてして「ニーズのある学生」を抽出し特定しようとしています。それ自体は必要な作業なのですが、それが可視化されてしまうことで、学生のやる気や動機づけが下がるという現実を見逃してはならないでしょう。アメリカの大学も、学生の質低下と多様化が起こった1970年代前後から、同じような問題に悩まされてきました。彼の地でも「リメディアルにすると学生は来ない」「授業外で勉強しなくてはならないことを知らない」ことは指摘され続けています。2003年

度に行われた調査によると、全米の大学一年生の66%は、高校3年生時に1週間の授業外学習が6時間未満です。そのうち48%が、A（信大の成績区分では「秀」）の成績で高校を卒業しており、その「秀」で卒業した学生のうち70%が、自分の学力は平均以上か、同年齢人口の上位10%に入っていると思っているというのです（McGuire, 2006, p.7）。そのような学生に「リメディアル」を突き付けても、自尊心を傷つけるだけでやる気を高めることはできません。信大生の学習時間調査（ニュースレターNo.20を参照）を照らし合わせると、アメリカも信大も、同じような学生を相手に苦労していると言えましよう。

### 発想の転換：サブリメンタル・インストラクション

以上より、学生が学習時間を確保してすこし努力しさえすれば、ある程度の解決が見込めることは明白です。学生の質の低下や多様化に対処しようとして、大学の水準よりも低い内容を提供したり、教員側が教育法を工夫したり世話を焼いたりすることで対応しようとしても、それは本末転倒といえましよう。

私たちが取り組むべき課題は、学生の「不足を埋める」ために教員が努力するのではなく、学生が「大学で成功する」ことをゴールに定めて視点を転換し、学生に努力をさせることだと言えます。リメディアルでは、ここをうまく解決することができませんでした。

この転換を見事に成し遂げたのが、アメリカで考案されたサブリメンタル・インストラクション（Supplemental Instruction）という画期的なプログラムです。サブリメンタル・インストラクション（以下「SI」）は、難度が高く、D（不十分）かF（不合格）の成績を取る受講者が30%以上である授業科目に的を絞った、「学生主導の課外学習支援プログラム」です（Koch and Gardner, 2006, p.33）。SIは、「ハイリスクなコースに特化したもので、ハイリスクな学生を相手にするものではない」（Koch and Gardner, 2006, p.33; 傍点引用者）。

「SIは内容を『下流に下ろし』たり、期待水準を引き下げたりはしない。事実、学生は正規の授業時間外で復習のためのセッションに出席することを要求される。これは通常、単位を与えられる活動ではなく、実際のところ、学生はより多くの課題をこなす」。そして「最終的には、SIは成績と全般的なリテンション率の双方を改善する」（Koch and Gardner, 2006, p.33）というわけです。

SIには専門職員（多くの場合教育学や心理学で修士号を持つ専門家）であるコーディネーターがおり、IR（インスティテューショナル・リサーチ）や各学部の基礎科目部門

等と連携をとって、ハイリスクな授業を抽出していきます。不合格者が多いが必修である数学や物理、化学や歴史など、また時には英語が、多くの大学でSIの対象になっています。前年度までにそれらの授業で優秀な成績をとった学生が、トレーニングを受けて指導員として入ることで、授業外学習セッションが運営されていくのです。

リメディアルで扱われてきた内容は、それぞれの授業で必要になった時点で、その関連性の中でSIセッションにおいて学習されるようにデザインされています。従って、それは（やっていることはリメディアルなのですが）学生に「リメディアル」として認識されることなく、「問題解決」かつ「成功体験」として経験されるという筋書きになっているというわけなのです。

SIがアメリカで近年拡大傾向にある理由は、個人を対象とせず、グループを対象とすることで、「リメディアル」の負のイメージが払しょくされるだけでなく、コストも比較的少なくて済むからです。正規の授業において学生が単位をよりよい成績で取るよう、学生に努力をしようと思わせ、その努力の場を提供することで、高いハードルを結果的に越えることが出来るように仕掛けられています。SIは必修でも強制参加でもありません。誰もが参加するのが望ましい、かつ、参加すれば成績が上がる活動である、と提示するようになってからは、成績の良い学生によるモデル効果や学生間の協力などが働いて、参加者が増え、SIに参加した学生の成績は（統計的に有意に）上がるようになったのです（Hurley, Jacobs and Gilbert, 2006, ほかも多数）。



### 学習支援のこれから

このようなプログラムでは、教員・専門職員・学生指導員がチームを組んで問題解決に取り組むので、教員個人の責任と負担を軽減し、負担をシェアすることを可能にします。しかし、このプログラムを機能させるためには、運営上の課題と、達成目標とその伝達・共有の課題を解決しなければなりません。専門職員のポストが構造上設置しにくい日本の大学では、特に支援・運営体制の構築は難しいでしょう。またチームで取り組むには、コミュニケーションの労をとるかどうかが成功に結び付くと思われそうですが、こういった仕事は面倒くさく、時間と労力がかかるものです。

学生が勉強するようになって、教員の仕事量は結局のところ減らないのかもしれませんが。しかし近年、日本の学習支援体制は間違いなくこの方向に向かっており、成果の見える新しい教職協働が根付く希望が出てきました。SIの成功は、コーディネーターの力量に左右されるところが大きいのですが、そのために、SI発祥大学であるミズーリ州立大学カンザスシティ校では、国内外から受講者を募集して研修を行っています。私たちも一度参加しなければと思っていますところなのです。

\*引用文献リストは、センターHPに掲載しています。  
 \*ミズーリ州立大学カンザスシティ校のサプリメント・インストラクション国際センター  
 <<http://www.umkc.edu/asm/si/index.shtml>>  
 \*本稿は、加藤善子・郷原正好・笠原千絵「学習成果に結びつく学習支援のあり方：教室内外の学習活動の統合を目指して」大学教育学会第35回大会 部会5：主体的学習の支援（2013年6月2日）の発表内容を踏まえたものです。（加藤善子）

### 活動報告 GPAの説明会を開催しています

本学では、平成26年度入学生からGPAが導入されることになっております。各部署のGPA制度への関心が以前よりも高まっているようで、各部署から高等教育研究センターにGPA制度の説明会の講師派遣依頼をいただいております。7月31日（水）は教育学部、8月1日（木）は繊維学部、8月6日（火）は農学部において、GPAの説明会が開催され、高等教育研究センターの加藤鉦三教授が講師を務めました。今回は、これまでに決定したことを説明した上で、GPA制度そのものについての質問、今後学部に委ねられる裁量、また各学部独自の質問に答えました。今後も、要望があれば、各部署へ伺いますので、下記連絡先までお問合せください。



▲農学部の様子

### お知らせ 高等教育研究センターに新任教員が着任しました



数学が苦手なのに、なぜか今は統計の仕事が多い。日本に来たのに、英語を使わなければならない。人生って、不本意の連続ですね。ならば、不可測の未来を楽しめばよいのです。前職の広島大学においてはマクロな視点で大学院研究を行ってきましたが、信州大学という具体的な大学を対象にする際には、きっと様々な予期せぬ事もあるでしょう。信州大学では、大学院を中心に仕事する予定ですが、それが逆に今の楽しみとなっています。その未知なる世界で道を踏み外さないように、ぜひ皆様のご協力とご指導をお願いいたします。李敏（り・びん）

### スタッフからひとこと

今年の夏も暑い日が続き、いよいよ日本も熱帯気候の仲間入りかと思うほどです。そういった時こそ、仕事の面でも熱く取り組みたいです。  
 （学務部学務課教務グループ 平かおり）

